

最新英語教育改革の概要（予定）

平成 28 年 2 月現在情報
OCEAN ENGLISH CLUB

【1】2020 年度 小学校英語改革案

	2013 年 10 月案	2016 年 2 月現在案
小学 3 年生・4 年生	必修（週に 2 時間）	必修（週に 1 時間：年間 35 時間）
小学 5 年生・6 年生	教科（週に 3 時間）	教科（週に 2 時間：年間 70 時間）

※主要教科の授業時間数の確保の問題から、学校現場より英語の授業時間を確保するのが困難であるという指摘が殺到したため、2013 年時点での構想より各週 1 時間削除する形で 2020 年度より施行される予定となっている。

【2】2020 年度 大学入試改革案

現行の「大学入試センター試験」に代わり、2020 年度からは下記「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」、また 2019 年度から順次「高校基礎学力テスト（仮称）」が実施される予定である。

A 大学入学希望者学力評価テスト（仮称 / 通称：学力評価テスト）

- 大学入試の 1 次試験の位置づけ。
- 2020 年度より実施予定。
- 難関・中堅大学のような「選抜性が高・中程度」の大学入試で活用する予定。
- 思考力を重視。
- 「問題文の長文化」「教科を横断するような問題」「記述式問題」を採用。
- 現行のセンター試験の 30 科目から減らした上で、どんな力を重視するのかを科目ごとに明確にした問題構成にする。
例えば、地理・歴史・公民なら日本史と世界史の関連づけなど「歴史的思考力」を重視。英語は「読む」「書く」「聞く」「話す」の 4 技能をみるため別日程での実施を検討。情報活用力をみる新科目も検討する。

B 高校基礎学力テスト（仮称 / 通称：基礎学力テスト）

- 高校 2 年生・3 年生の基礎知識の定着度を測る試験。
- 入試が主目的ではなく、定員割れしたり学力不問だったりする「入試が機能していない」大学が入学選抜の参考資料に活用することも想定。
- 国語、数学、英語：2019 年度導入予定。
- 理科、社会：2023 年度以降に導入予定。
- 希望参加方式で、年に 2 回（夏・秋）に実施予定。（パソコンを使って解答する。）

【3】2020年度以降 英語大学入試スピーキングテストの評価法

2020年度の中学校指導要領の改定において、「中学校では、基本的に英語で英語の授業を行うことが望ましい。」という文言が入る予定である。現状高校でも進学校では英語の授業を極力英語で行っている。同時に2020年度より、小学3年生・4年生英語は必修（週に1時間）、小学5年生・6年生英語は教科（週に2時間）となる。

合わせて、2020年度大学入試から施行予定の英語試験では、「スピーキングテスト」が初めて導入される。この場合、外部（業者）テストの導入が検討されている。大学入試における英語スピーキングテストの形式及び評価法は、現状IELTS（アイエルツ）で行われている以下のような方法が採用される可能性が極めて高い。

PART 1	Interview インタビュー（4～5分）
試験官から「住居・家族・勉学・趣味・生活」など身近な話題について一般的な質問を受ける。	
POINT： 質問にただ短く答えるだけで終わらないようにすると評価が上がる。 （例）”Have you ever visited English speaking countries？”（あなたは今までに英語圏の国に行ったことがありますか。）と質問された場合、単に”Yes, I have. / No, I haven't.”と答えて終わるのではなく、”Yes, I have. Last year, I went to Canada with my family, spent a week, and enjoyed sightseeing.“などと何かプラスすると、試験官に好印象を与える。	
PART 2	Speech スピーチ（3～4分）
試験官から「カード」を渡される。カードにはスピーチとその中に含めるべきポイントが3～4つ記載されている。1分間の準備時間が与えられる（メモを取っても構わない）。その後、1～2分間のスピーチを行う。最後にスピーチに対し質問を受ける。	
POINT： このパートは説明能力、表現力が問われる。記載されている3～4のポイントは全てスピーチの中に入れると評価が高い。また、1つポイントについての説明は2～3文で構成するとよい（短すぎても長すぎてもよろしくない）。与えられてた1分間にいかに構想をまとめるかが大きなカギとなるので、日ごろからこうした訓練（練習）を積んでおく必要がある。	
PART 3	Discussion ディスカッション（4～5分）
試験官とパート2のトピックに関連した話題について話し合う。	
POINT： このパートの課題は「意見とその理由を説明すること」にある。ここでも短い返答は禁物。ちょっとした体験談を交えると臨場感が増し評価が上がる。試験官の質問が聞き取れなかった際も、きちんと”Sorry. I didn't quite catch that. Could you please say that again?“などと言うことが大切。これもひとつのコミュニケーション能力と判断される。	

<大学入試英語スピーキングテストの採点基準>

前述3つのパートの試験は、以下の4つの採点基準によって評価され、IELTSの場合結果は0.5刻みで1.0～9.0のスコアで表示される。

1. 流暢さとまとまり

- ・適度な早さで、とぎれることなく話すことができているかどうか。
- ・話の流れが論理的で分かりやすいかどうか。
- ・接続語句や代名詞が適切に使われているかどうか。

2. 語彙力

- ・語彙が豊富かどうか。
 - ・単語が適切に使われているかどうか。
 - ・言い換えを適切に行っているかどうか。
- ※「言い換え」とは、言いたいことを表す単語が思いつかない場合でも、他の平易な単語を駆使して相手に内容をしっかり伝えられるかどうかの能力を指す。

3. 文法力

- ・文法が幅広く正確に使われているかどうか。
- ※従属節を的確に使用してやや複雑な構造の文章を正確に話すと評価が上がる。

4. 発音

- ・聞き手にどれくらい負担を強いているか。
 - ・話の中に理解できない部分がどれくらいあるか。
 - ・母語（日本語）の影響がどれくらい目立つか。
- ※ネイティブに近い発音を期待されているわけではないが、明らかに日本語発音または勘違いした（自分流の）発音で試験官に聞き取れないようなことがあると減点対象となる。もちろんネイティブに近い発音であれば評価は上がる。

■さいごに

2020年度入試より、このようなグローバルスタンダードのスピーキング評価法を導入する方向で、現在文科省は急ピッチに構想を進めています。

しかしながら、このようなスピーキングテストに対応するためには、学生たちにも十分な準備（訓練）が必要となります。もちろん、大学入試が変わるとなれば、高校英語が変わり、やがて中学英語も変わりますが、早い内から「話す訓練」を行っていく必要があるでしょう。しかしながら、新英語入試（または外部試験）で高得点をとれる力があれば、大学の推薦入試や、就職に有利になることは間違いありません。

今後の大学入試では、英語のみならず、暗記力よりも思考力・表現力を問う問題が増えます。マークシートとは違い、採点には相当の労力を要しますが、入試としては良い傾向と言えます。

これからの学生には、「考える力」「伝える力」が要求されることとなります。